



Title	W. Blake : The Book of Urizen について
Author(s)	柏木, 俊和
Citation	Osaka Literary Review. 1965, 4, p. 32-42
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25785">https://doi.org/10.18910/25785</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## W. Blake : *The Book of Urizen* について

柏 木 俊 和

*The Book of Urizen* (1794) はこの物質世界や人間がどのようにして存在するようになったかを物語る一つの ‘Creation Myth’ である。旧約聖書の *Genesis* と言うオーソドックスな ‘Creation Myth’ があるにも抱らず、何故 Blake が独自の ‘Creation Myth’ を作らなければならなかつたか、それにはそれなりの理由があつた筈である。では一体、Blakeはこの作品によって何を意図したのであろうか。神の創造の偉業を賛美しようとしたのであろうか。無論、Blake は神の創造を賛美し全的に受容したかったであろう。しかし、この作品には殆んどペシミスティックと言つてもいいくらいの暗さがあり、到底神の創造の偉業を賛美しているとは思われない。この作品は何物かの賛美であるよりははるかに何物かへの攻撃である。

この作品は題名が示すように、Urizen についての書である。Urizen については色々な解釈がなされているが、一応、「理性」の権化であり、道徳律や戒律の作製者であると言うことが出来るであろう。この作品に付けられた序詩が暗示しているように、Urizen は言わば ‘primeval Priest’ なのである。そして、この作品は ‘primeval Priest’ としての Urizen が、どのようにして生れ、又、どのようにしてその ‘assum'd power’ を獲得するようになったかを、一つの ‘Creation Myth’ と言う形で物語ろうとしているのである。

まず、序詩によると、作者は永遠界とそこに住む Eternals の存在を想定し、この作品は作者が Eternals の呼び掛けに応えて書いたものであるとしている。永遠界とは天地創造以前の時間と空間を超越した世界であり、作者は次のように歌っている。

Earth was not, nor globes of attraction;  
The will of the Immortal expanded  
Or contracted his all flexible senses;

Death was not, but eternal life sprung. <sup>①</sup>  
 (Chap. II, 1)

このような世界にやがて「恐怖の影」が生じ、それが Urizen になる。

Lo, a shadow of horror is risen  
 In Eternity, Unknown, unprolific,  
 Self-clos'd, all-repelling! What Demon  
 Hath form'd this abominable void,  
 This soul-shudd'ring vacuum? Some said  
 It is Urizen. But unknown, abstracted,  
 Brooding secret, the dark power hid.

(Chap. I, 1)

Urizen について ‘shadow’ と言う言葉が使われていることは意味深い。第1章4節にも ‘a self-contemplating shadow’ と言う言葉が使われている。Urizen はあくまで実体そのものではなく、その影であることを暗示している。Urizen は ‘self-contemplation’ によって永遠界から次第に分離し始め、闇の中でさかんに時間を分割し、空間を測定し始める。本来時間も空間も存在しない無限で永遠の世界の中に、Urizen は時間と空間に限定された自己の世界を作り始める。やがて、Urizen は地水火風の四大から陸地を造り、Eternals に向って次のように言う。

Lo! I unfold my darkness, and on  
 This rock place with strong hand the Book  
 Of eternal brass, written in my solitude,  
  
 Laws of peace, of love, of unity,  
 Of pity, compassion, forgiveness,  
 . . .  
 One command, one joy, one desire,  
 One curse, one weight, one measure,  
 One king, one God, one Law.

(Chap. II, 7-8)

Urizen は陸地と言う物質的世界の創造者であるばかりでなく、道徳律

や戒律の作製者でもある。作者は上の箇所にアイロニーをこめていることは明白である。Blake にとっては、本来愛とか歓喜とか言ったものは、‘law’にはなり得ないし、又、なるべきものでもなかった。そう言う愛とか歓喜等を一つの律法によって束縛することは圧制である。‘One Law for the Lion & Ox is Oppression’<sup>⑨</sup>なのである。

このような Urizen の挑戦に対して、Eternals は憤り、Urizen の沙漠に猛火を注ぐが、Urizen は山や丘を掘ってそこに身を隠し、四方八方に巨大な屋根を築く。かくして、Urizen の世界が成立するが、それは永遠界からはるかに見下すと、「あがき鼓動する人間の心臓」のような「黒い球体」のように見える。

次にこの作品には Los が登場する。Los は Time を表わすらしいが、又、‘Eternal Prophet’と呼ばれるところから、Imagination をも表わしていると思われる。Los は *Milton* や *Jerusalem* のような ‘Major Prophecies’に於いては、殆んど Blake 自身の分身になっているうである。この作品ではそれほど積極的な意味を持っているかどうかは疑問があるが、やはりこの作品に於いても ‘Eternal Prophet’と呼ばれているところから、<sup>⑩</sup> Imagination をも表わしていると考えていいよう思う。

ところで、Imagination を表わす Los と Reason を表わす Urizen とは本来は一体であった。と言うのは、作者は第3章6節のところで、Urizen は Los の脇腹から引き裂かれたと語っているからである。ここで作者は Imagination と Reason との unity が失われ、その二つが次第に分化して行く過程を象徴化しているのではないかと思われる。

Urizen は Los から引き裂かれた痛みのために仮死状態に陥り、Los はその Urizen に網を巻きつけ、その変質を防ぐために鉄と金属の鉢でとめておく。更に Los は「ふいご」や「火ばさみ」や「ハンマー」を使って鎖を作り、それが時間、日、年となって Urizen を無に帰することから守る。このことは、Time を表わす Los が Urizen を時間の世界に拘束しておこうとすることを意味するのであろう。しかし、このようにして Los も Urizen と同様に永遠界から次第に墮落して行くのである。Urizen は Los の働きによって、頭脳、背柱、心臓、眼こう、耳、鼻孔、肺、舌、四肢が次第に形成されて行く。要するに Urizen が次第に人間

の姿に形成されて行くのである。ここで注意すべきことは、作者は Los が Urizen を次第に人間の身体に形成して行く過程を 7 年とし、各々の最後を ‘a state of dismal woe’ と言う行で結んでいることである。

7 と言う数は言う迄もなく、*Genesis* に於いて神が天地とその万象を完成し、7 日目にそのすべての作業を終って休まれたと言う箇所に関連しているが、*Genesis* では ‘God saw that it was good’ と言う言葉が繰り返されているのに対し、*The Book of Urizen* では ‘a state of dismal woe’ と言う言葉が繰り返されている。Urizen を人間の姿に形成して行こうとする Los の仕事は絶望的なものであることを作者は暗示している。この ‘Creation’ に対する作者のペシミズムは、この作品に於いて次第に深まって行く。Los は自分の仕事から恐ろしさのあまり後込みし、彼の巨大なハンマーは手から落ちる。これは Imagination の衰退を暗示する。かくて、Los の永遠の生命も今や夢のように抹殺され、冷い孤独と暗い空虚とが Los と Urizen とを包む。Los は Urizen を哀れみ始め、心が分裂し、その分裂した心から最初の女性である Enitharmon が生れる。Los が Time を表わすのに対し、Enitharmon は Space を表わすと解釈されているようである。又、Los と Enitharmon とは当然 Adam と Eve を連想させる。しかし、Blake によれば男女の分化は錯誤の根源である。*Genesis* に於いては、神は Adam に向って ‘It is not good that the man should be alone; I will make him a help meet for him.’<sup>④</sup> と言うが、*The Book of Urizen* に於いては、Eternals はこの最初の女性の誕生に身ぶるいし、彼女を Pity と名付ける。Blake によれば Pity は決して眞の Love ではない。*Songs of Innocence* の ‘The Human Abstract’ の第 1 節で、Blake は ‘Pity would be no more / If we did not make somebody Poor.’ と歌っている。つまり、Pity は他人の不幸を前提として生ずるものだからである。Blake は Pity の由来を、言わば Los (Imagination) の分裂にあるとしているようである。

次に Blake は第 5 章 12 節に於いて、Science の由来を説明する。Eternals は Enitharmon の誕生に身ぶるいし、Los と Enitharmon の住む時間と空間の世界を永遠界からさえぎるべく天幕を張る。そして、そ

の天幕を *Science* と呼ぶ。

They began to weave curtains of darkness;  
 They erected large pillars round the Void,  
 With golden hooks fasten'd in the pillars:  
 With infinite labour the Eternals  
 A woof wove, and called it *Science*.

(Chap. V, 12)

これは、*Science* は永遠界を明らかにするよりは、それをさえぎるものであることを暗示する。

さて、Enitharmon はやがて子供を産み、それを Orc と名付ける。Orc はすでに *America* や *The Book of Urizen* と同じ年に書かれた *Europe* に出て来る ‘the spirit of revolt’ を表わす。

このようにして、次第に様々な人間が生じて来るのを見て、永遠界は身ぶるいする。

Eternity shudder'd when they saw  
 Man begetting his likeness  
 On his own divided image.

(Chap. VI, 2)

この箇所は無論 *Genesis* の1章26節の ‘And God said, Let us make man in our image, after our likeness.’ への allusion であることは明らかである。しかし、その間には大きな相違があることも明らかである。*The Book of Urizen* に於いては、自らの ‘divided image’ によって同類を増やしているに過ぎない。かくて、この世界と永遠界との間にかけられていた天幕は閉じられ、Los はもはや永遠を見ることが出来なくなる。

次に永遠界から完全に遮断された Los と Enitharmon は、Orc を山上に連れて行き、嫉妬の鎖で岩に縛りつける。

They took Orc to the top of a mountain.  
 O how Enitharmon wept!  
 They chain'd his young limbs to the rock  
 With the Chain of Jealousy

Beneath Urizen's deathful shadow.

(Chap. VII, 4)

反逆の精神を象徴する Orc も、Urizen の支配する世界に於いては、嫉妬の鎖で束縛されざるを得ない。今迄仮死態状にあった Urizen は Orc の叫びを聞いて目覚め、彼のはら穴を探り始める。そして、Urizen は計量器、四分儀等を使って無限なるものを拘束し、限界付けようとする。

He form'd a line & a plummet  
To divide the Abyss beneath;  
He form'd a dividing rule.

He formed scales to weigh,  
He formed massy weights;  
He formed a brazen quadrant;  
He formed golden compasses  
And began to explore the Abyss;  
And he planted a garden of fruits.

(Chap. VII, 7—8)

この箇所に出て来る ‘compass’ は、S. Foster Damon が指摘しているように、<sup>⑤</sup> 旧約の *Proverbs* の 8 章 27 節の ‘When he set a compass upon the face of the depth.’ と次の Milton の *Paradise Lost* からの引用に関連している。

... and in his hand  
He took the golden Compasses, prepar'd  
In Gods Eternal store, to circumscribe  
This Universe, and all created things: ...

(VII, 224—227)

*Proverbs* に於いても、*Paradise Lost* に於いても、‘compass’ は神の使う道具であり、神の創造の偉業に関連していると思われるが、*The Book of Urizen* では ‘compass’ は Urizen に属するものであり、他の

測量の道具と同様、無限なるものを限界付ける働きを持っている。このような‘compass’と言う言葉にはアイロニカルな意味がこめられている。この箇所で作者は Urizen を旧約や *Paradise Lost* に於ける神の立場に置くことによって、旧約や *Paradise Lost* に於ける神は、実は戒律によって人間の魂を抑圧し、本来無限なるものに限界をもうける Urizen に過ぎないのだと云うことを示そうとしているように思われる。このことは、Urizen がしばしば旧約の神である Jehovah との連想に於いて用いられていることからも、決して無理な解釈であるとは思われない。例えば、*America* の中に次のような箇所がある。

これは ‘the spirit of revolt’ である Orc の言葉であるが、ここでは Urizen は十戒を受けた Jehovah の神と関連を持っていることは明瞭である。又、先程引用した *The Book of Urizen* の第 7 章 8 節の ‘A garden of fruits’ は Eden の園を暗示している。ここでも、Eden の園を歩んだ Jehovah の神と Urizen との連想が結びついている。

ところで、Urizen には地・水・火・風を表わす 4 人の息子と その他に娘達がいることになっているが、Urizen は彼等が彼の律法を一時も守ることが出来ないので彼等を呪う。第 8 章の終りには、「宗教の網」と言う言葉が出て来る。この「宗教の網」は Urizen の悲しみの心から生じたものである。そして、第 9 章には、その「宗教の網」におおわれた人々（後にエジプトの民であることがわかる）が如何に「永遠の生命」を忘れた愚物になり下ってしまうかを描いた箇所がある。

Six days they shrunk up from existence,  
 And on the seventh day they rested,  
 And they bless'd the seventh day in sick hope  
 And forgot their eternal life.

• • •

And their children wept, & built  
 Tombs in the desolate places,  
 And form'd laws of prudence, and call'd them  
 The eternal laws of God.

(Chap. IX, 3—5)

この箇所も言う迄もなく神の創造の7日間に引っかけた痛烈なアイロニーである。Urizenの宗教に毒された者は‘laws of prudence’を作り、それを‘eternal laws of God’として奉信するのである。又、Urizenの「宗教の網」におおわれる人々は、次のように感覚器官が縮み上ってしまう。

• • •

For the ears of the inhabitants  
 Were wither'd & deafen'd & cold,  
 And their eyes could not discern  
 Their brethren of other cities.

(Chap. IX, 7, ll. 5—8)

このUrizenの「宗教の網」の猛威に対して、Urizenの4人の息子の一人であるfireを表わすFuzonが、残ったUrizenの子供達を集めてUrizenの支配するエジプトを脱出することでこの作品は終っている。言わば、この作品はBlakeの*Genesis*であると同時に、*Exodus*でもあると言うことが出来るであろう。

以上のように、Blakeは*Genesis*を多分にアイロニカルに取り扱いながら、それを全く違った独自の‘Creation Myth’を作り変えているこ

とがわかる。この作品には神の創造の偉業を賛美している箇所は見当らない。むしろ、この作品は一種のペシミズムと苦悶をたたえたアイロニーに充ちている。この作品は序詩が語っているように、正に ‘dark visions of torment’ である。では一体何が Blake をしてこのように暗いヴィジョンを描かしめたのか。その大きな理由の一つは、当時の世俗化し堕落したキリスト教倫理と Blake 自身の内なる生命主義的なモラルとの間の激しい断絶感にあったと思われる。Blake が当時のキリスト教社会に見たのは、愛の神ではなく、戒律によって人間の生命を抑圧する律法の神であった。Blake はこの作品に於いて、Urizenを旧約の神 Jehovah と連想させることによって、当時のキリスト教社会を支配していた神の観念を攻撃しようとしたのである。Blake にとって、この作品は決して当時の社会と無縁な荒唐無稽な神話ではなかった。それは、この作品がもう一方では、Newton によって代表される mechanistic cosmology, つまりこの世界を一つの機械仕掛けと見なすような宇宙論に対する攻撃をも意図していたことからも言える。(Blake がこの作品で Newton の万有引力説を意識していたことは、すでに引用した第2章1節の ‘globes of attraction’ と言う言葉が示している。) Blake にとっては、この世界は決して機械仕掛けではなく、それ自体生ける有機体であった。この作品にそう言う mechanistic cosmology への攻撃の意図があったことは、何よりも Urizen が旧約の Jehovah との連想と同時に、一見奇妙に思えるが、Newton や Locke とも密接な関連を持っていることからも伺える。Blake は *The Book of Urizen* と同じ年に書いた *Europe* の口絵として ‘The Ancient of Days’ と題する絵を描いている。この絵は丁度この作品の第7章8節の箇所を描いているかのようであり、Urizen と覚しき者がコンパスで空間を計っている絵である。<sup>⑨</sup> この絵を書いて一年後、Blake は ‘Newton’ と題する水彩画を描いている。それは Newton が物質界を表わす水の上に腰かけて、かがみこんでコンパスで一心に図形を描いている絵である。この二つの絵には何か関連があるようと思われる。多分、Blake の心の中には、Urizen と Newton とが結びついていたに違いない。事実、*The Book of Urizen* の一年後に書かれた *The Song of Los* の中には、次のような箇所がある。

Thus the terrible race of Los & Enitharmon gave  
Laws & Religions to the sons of Har, binding them  
more

And more to Earth, closing and restraining;  
Till a Philosophy of Five Senses was complete,  
Urizen wept & gave it into the hands of Newton &

Locke.

(ll. 44-48)

Newton や Locke は、Blake にとっては、想像力を軽視し、‘a Philosophy of Five Senses’を説く合理主義者の代名詞である。Urizen はそのような Newton や Locke とも関連を持っているのである。

このように、Urizen は一方では戒律を人類に課した旧約の神 Jehovah に、又他方では Newton や Locke と言った近代合理主義者にも関連を持っている。このことは一見奇妙に思えるが、Blake によれば、人間の想像力の衰退と道徳的な抑圧とは密接な関連を持っているのである。この二つの面は Blake にとっては表裏一体のものであった。この点を考慮に入れれば、Urizen が一方で Jehovah に、他方では Newton や Locke に関連するのも不思議ではない。

以上のように、Blake はこの作品に於いて、この世界を支配している様々な錯誤の由来を独自の神話によって説明しようとした。その神話によれば、全ての錯誤は Urizen が永遠界から分離し、この世界を創造し支配するようになったことに起因する。永遠界とは未だ理性や感情や意志等に分化されていない人間精神の primordial な状態を意味すると思われる。全ての錯誤はそのような unity を持った人間精神の primordial な状態から、理性 (Urizen) が次第に分離することによって、人間精神の unity が次第に失われ、理性が支配権を持つようになったことから生じたと解釈することが出来ると思われる。この作品では如何にして人間精神の unity が失われたかと云うことが主題となっているが、先程も述べたように、この作品に関する限り、この世界の創造について Blake はかなりペシミスティックである。この世界を支配しているのは、愛の神ではなく、実は Urizen なのであると云うペシミズムである。このペシミズム

を克服し、如何にして失われた人間精神の unity が回復されるかと云うことが主題となるためには、 *The Four Zoas*, *Milton*, *Jerusalem* の所謂 ‘Major Prophecies’ を待たなければならない。

〔注〕

- ① Cf. *Genesis*, I. 2.
- ② *The Marriage of Heaven and Hell*.
- ③ Chap. IV, I.
- ④ *Genesis*, II. 18.
- ⑤ S. Foster Damon: *William Blake: His Philosophy And Symbols*, p. 353.
- ⑥ Cf. Letter to Thomas Butts, 2 Oct. 1800:

Each grain of Sand,  
Every Stone on the Land,  
Each rock & each hill,  
Each fountain, & rill,  
Each herb & each tree,  
Mountain, hill, earth & sea,  
Cloud, Metor, & Star,  
Are Men Seen Afar.

- ⑦ この絵については、Kathleen Raine: *William Blake* (Longmans, Green & Co, 1951) を参照。
- ⑧ この絵については、Mark Schorer: *William Blake: The Politics of Vision* (Vintage Books) 参照。